

光あまねし

市川茂子

夫を詠み載りたる昭和万葉集はるかとなりて時代越えゆく

東天に昇る太陽新年の光あまねし仰ぐわれらに

清新な寒気みなぎる新年の詣でに期する思いのひとつ

わが思い自分史とうも消えゆくに年の始めの歩み重ねん

晴れの日のつづく所に安くいてそのち冬の嵐あるやも

流行のインフルエンザ恐れつつ部屋に入る陽を浴びて動かず

握力の衰えとみに気づく日よブリ大根の厚みの不揃い

次の世を生きなん望み夢にして脳裏に描くたわいなきこと

益のなき過去は芥となる物の箱一つずつ空になしゆく

用のなき物の片付け昨日今日息つきながらのろのろ動く